令和５年度小松市立芦城中学校　学校評価２

	目標・具体的取り組み	取組の状況（中間・８月提出）	取組の成果と課題（年度末・３月提出）
生徒指導	生徒が主体となり、学校をよりよくするための活動を見つけ出す力を育成する。 ・「どんな学校にしていきたいか」生徒が主体となり企画・実施できる場を設定できるように、支援する。その方策として、「毎月１回の生徒集会を開催する」「自校の問題を考える集会を企画する」「校則についての見直しを行う」「終礼時に帯タイムを実施し、生徒同士の繋がりを深める活動を行う場面を設定する」「学級活動の充実を図り、教室内での居場所づくりエンカウンターを取り入れる」といった実践に取り組んでいく。	・生徒集会の場を利用して、自校の現状や課題と捉えていることを、話し合いをし、全校生徒に周知・徹底できるように工夫している。 ・学校を活性化するために「校歌」を大切にしたいと考えた。集会の最後に歌詞をスクリーンに出して、大きな声で歌う手立てを行った。その結果大きな声で歌うことのできる生徒が増えているのが現状であるため、継続していきたい。 ・7月の集会では、サミット実行委員が中心となり、「帯タイムで行っているアシトーク」について、アンケートを取ったところ、取組によりクラスメイトと話やすくなったと回答した生徒が８割程度という結果であった。しかしその一方で、効果を感じないと考える生徒もいるため、今後も生徒が活発に活動していける内容を検討していきたい。 ・「校則の見直し」については、生徒会執行部に「どんな学校にしていきたいか」という問いを投げかけているところである。	・毎月の集会では、生徒指導上の気になる点や生徒に意識してほしい点について、問題提起することができた。また、学校の活性化に向けて、「校歌」の取り組みを行った。その結果、少しずつ校歌を歌う声が大きくなってきているので、継続して取り組んでいく。 ・今年度は学校研究や小中学生サミット実行委員の担当者と協力し、「帯タイム」の中で「関わり合う」場面の取組を設定することができた。その結果、自分自身のことを肯定的に捉える生徒が増えてきた。現状に満足せず、今後もよりよい活動にできるように、取組内容を検討していく。 ・「校則の見直し」について、議論を進めることができなかった。今後は、生徒会と話をする場面を作りながら、見直しについて取り組んでいく。
特別支援教育	特別な支援を必要とする生徒に適切な支援を行うことができる体制を整える。 ・特別支援教育校内委員会を計画的に開催し、支援体制の検討とその情報の共有を図る。 ・学年会の場を活用して支援を必要とする生徒の状況把握に努めるとともに、具体的な支援策を検討・実践し、職員会議の場で共通理解を図る。 ・必要に応じて、専門機関や専門家につないで、支援の方法を検討する。	・昨年度から引き継いだ通常学級在籍生徒の「個別の教育支援計画」に記載されている内容の掌握や、該当生徒の状況把握を、コーディネーターが行うことに時間がかかり、校内委員会の開催が遅れたが、８月の委員会の開催において、今年度の支援体制について必要な事項を協議し確認できたので、今後はその体制をさらに整えていくことに注力する。 ・通常学級に在籍する生徒について、今年度新たに「個別の教育支援計画」を作成していく生徒の検討を行い、個人懇談会において保護者の意向を聞くことができた。 ・特別支援教育に関わる情報を掌握できるように、学年主任や学年会との連携をさらに図っていく。	・特別支援教育校内委員会の日程を月歴に掲載し、計画的に会を開催し、協議の内容を記録として残すことができた。 ・学年会と連携して、支援を必要とする生徒の状況把握や具体的な支援策を検討することができた。 ・必要な場合においては、スクールカウンセラーや市教育センター相談員に相談を依頼し、生徒や保護者の支援にあたることができた。 ・今後はさらに、学年での困り感を、職員全体で迅速に共有できるようにし、またその課題に対応できるような体制を構築していく。 ・支援員の配置については、状況に応じて適切に配置できるように、継続して努めていく。
道徳教育	「考え議論する道徳」の教育実践の充実を図る。 ・ローテーション道徳を実施し、教材への指導力を高める。 ・学級や学年の枠を超えた、縦割り道徳をおこなうことで、縦のつながりを深める。 ・家族道徳によって、保護者の考えを聴き、多面的・多角的に思考を深める。 ・「心のテーマ」を活用し、豊かな道徳性をはぐくむ。	・年間計画に基づいて、取組を進捗することができた。 ・講師を招聘しての師範授業、校内研修を行った。その後、以下の３点について共通実践を進めていくことを確認することができた。 ①「拡散」と「収束」を意識した発問を行う。 ②ICTを毎時使うことを心がける。 ③コの字型の机の配置で授業を行う。 ・心のテーマを活用し、毎月の生徒集会で呼びかけを行うことで、全校で道徳的価値について考える場面を設けることができた。	・「道徳の授業づくりの重点」を設定し、全職員で共通理解を図ることで、授業の質を高めることができた。その結果、ねらいに沿って学びを深める生徒の姿が見られるようになった。 ・今後は、全教育活動において道徳教育がより一層意識され、推進されるようなカリキュラム・マネジメントの充実を図る必要がある。その際には、今年度は取り組めなかった家庭や地域との関わりをもたせた道徳の授業についても検討していく。
キャリア教育	働くことの意義を理解し、将来を見通して進路を選択する力を育成する。 ・学級活動や総合的な学習の時間を中核として、年間計画に基づいた指導を行う。 ・玉成会と連携し、地域や卒業生などの人材を招聘し、体験的活動や啓発的活動を効果的に行う。 ・生徒と保護者の意思統一のもと、適切な進路選択の助言に務める。	・年間指導計画に基づいて指導を進めている。 ・玉成会と連携して３年生“ようこそ先輩”を実施した。１年生は３学期に“働く人に学ぶ会”を予定している。２年生の職場体験が中止となったが、２学期に企業訪問を行い、働くことについて学ぶ予定である。 ・個人懇談会や個別の家庭連絡の際に保護者の意向を確認することに加え、学校からの便り、３年生では進路に関係する通知を通して、親子間での進路に関する会話を促すことができている。	・年間指導計画に基づいて指導を進めることができた。 ・玉成会と連携した活動は、生徒が将来について考えるための貴重な機会となった。２年生は地域の協力を得て企業訪問を行い、働くことについて考えたが、来年度は職場体験を実施する方向で考える。その体験内容については、今年度の取組内容を踏まえた上で検討する。 ・三者懇談会や個人懇談会に向けた準備を丁寧に行い、建設的な話し合いとすることができた。 ・総合的な学習の時間の核となる年間計画のねらいについては、今年度の内に、学校全体として見直しを進めたい。
保健健康教育	身体や健康に対しての意識を高め、的確に判断し主体的に行動する力を育成する。 ・アフターコロナに向けて、状況に応じた指導を実施する。 ・ミニ健康指導を年間３回実施する。 ・生徒保健委員会による保健検定を実施する。 ・学校保健委員会を、生徒や保護者を交えて開催する。 ・地場産物や旬の食材を紹介することで興味を引き出し、食に関する指導の充実を図る。	・アフターコロナの指導においては、換気と手指消毒の指導を引き続き行っている。 ・ミニ健康指導と保健検定は１学期の間に１回実施した。 ・学校保健委員会の内容については、８月に保護者も交えた上で検討していく。 ・給食委員会の取組として、地場産物や旬の食材を紹介する動画を作成し、食に関する興味付けの機会を全校に向けて発信することができた。	・感染症については、国や県、市の対応を参考にしながら季節や行事に合わせた対策を適宜示すことができた。 ・ミニ健康指導は、年間２回の実施となった。 ・学校保健委員会では、全校生徒や保護者、学校三師が体育館に集まり、子どもと大人との関わり方や、ストレスとの付き合い方について考えられる良い機会となった。 ・給食時間に地場産物についての動画を流したり、生徒が給食コンクールや朝ごはんの取組で考案したメニューを放送や掲示物で紹介したりすることで、生徒の食への意識を高めることができた。
生徒会活動	生徒主体の活動を通して、生徒の自治能力を育成する。 ・生徒会執行部や各委員会同士の関わりを増やし、生徒会活動をより活性化する。また、その活動の様子を掲示等で全校生徒と共有できるようにする。 ・日頃から学年を越えた縦割の活動を設ける。 ・生徒集会では、前年度以上に生徒が活躍できる場を設け、生徒が達成感を感じることができるようにする。 ・目安箱や生徒アンケート、小中学生サミットなどを通して、全校生徒の意見を取り入れた主体的な活動を積極的に行う。	・今年度は生徒会掲示板に各委員会の活動の振り返りを毎月掲示し、活動の見える化が図れるように工夫している。 ・生徒会執行部と環境委員会が協力して取り組んだ清掃活動（＝プロジェクトC）や生活委員との協働による心のテーマに係わる取組をとおして、生徒会執行部と各委員会との関係をつなぐことができている。 ・生徒集会を毎月実施し、小中学生サミットや心のテーマについて、全校生徒のアンケート結果などをもとにして、生徒会の現状について話題や問題を提起することができている。２学期は生徒集会のみならず、様々な場面で生徒の意見をもとにした話し合いや活動を進めていく。 ・各委員会で縦割りの活動を増やすことにより、会の活性化を図ることにつながっている。（放送委員会の放送当番、生活委員会の挨拶当番など）	・各委員会活動の振り返り掲示版の活用を継続し、活動の見える化を進めることができた。また、今年度は委員会活動ファイルを生徒会執行部が取りまとめることによって、生徒会執行部と各委員会とのつながりを強めることができた。 ・運動会、文化祭ともに生徒主体の行事となり、学年を越えた縦割りの活動の場とすることができた。 ・生徒集会や小中学生サミット集会では、学校のリーダーとして活躍する生徒の育成を進めることができた。また、生徒主体で活動する雰囲気をつくることができた。 ・今後は、生徒会活動がさらに生徒主体による活動となるよう、そのための仕掛けや工夫を考えていきたい。

学校関係者評価	○小中学生サミットについて （評議員）以前参観した中学生サミットが、現在は小中学生サミットとして取り組まれており、校種をこえた交流の場が広がっていることを知った。他校のよい実践を自校の取組にスピード感を持って反映させ、実践を進めている点が素晴らしい。 ○いじめについて （学校）３つの小学校の生徒が合わさることで、それまでとの環境の変化や、言葉や態度をきっかけとするトラブルがあることを認識している。トラブルへの対応については、正確な情報収集に基づいた即日対応を原則とし、また自分や他者を認めるための良いところ探し等の未然防止にも取り組んでいる。 （評議員）子どもの指導について、学校に頼りすぎているように思う。日常の中で、子ども達と家族との会話の時間や子どもが親から怒られるような場面が少ないように感じる。特にトラブルが起こった際に、家庭で適切な指導がなされているかについては、不安がある。よいところ探しの活動は、それを探す方も探してもらう方にとっても、よい活動だ。リフレーミング等の考え方のトレーニングが、これからの就職活動等においても生かされる捉え方だと考える。 ○学校の雰囲気について （評議員）授業参観の様子から、生徒と教師の関係が対等であり、話し合える関係にあると感じた。他方、親しき仲にも礼儀ありという点において、生徒には規律を守らせることも大切である。 ○学習について （評議員）ＧＩＧＡスクール構想による学習用端末を、生徒に駆使させるために、タイピング等の検定に挑戦させる機会があるとよい。学習に対する興味や意欲喚起につながるよう、教科書だけではない新しい世界に生徒が触れられるように、掲示板を用いるなどの工夫をして、情報の与え方の手立てを考えてほしい。